

晩年における西山宗因の連歌と和歌

— 小笠原藩との関係を中心として —

池 田 富 蔵

はしがき

晩年の連歌と和歌について考えてみたい。

一代の鬼才、談林派の開祖西山宗因と九州との関係の深いことは、まず彼自身が肥後国八代出身というその出生に始まる。とりわけその晩年における連歌と和歌とを考える場合には豊前小倉小笠原藩との関係をぬきにしては考えられない。私が西山宗因に関心を持ったことは、幸いにもというか、奇しくもというか、私の郷里豊前の国福岡県築上郡椎田町大字高塚に鎮座する氏神「綱敷天満宮」(昔から周防灘に面した白砂青松の浜にあるため「浜宮」ともいう。祭神は菅原道真公)に宗因自筆本の(一)「賦初何連歌百韻」(延宝二年八一六七三〇六九才)と(二)「浜宮千句」(同六年八一六七八〇四才)の二つの資料が所蔵され、これを発見したのに端緒がある。

(二)の方は、先学の研究によりその名は知られていたが、内容は明らかにされておらず、(一)は筆者が発見した全く新しい資料であり、この二つの宗因連歌懐紙をあわせて昭和三十九年三月に「西日本国語国文学会翻刻双書」(九大文学部国語国文学研究室内)の一冊として刊行した。

本稿は、その後の調査を加え宗因と小笠原との関係を中心に彼の晩年における西山宗因の連歌と和歌

— 小笠原藩との関係を中心として —

一、宗因の基礎時代から世に出るまで

宗因は、慶長一〇年(一六〇五)に生まれ、天和二年(一六八二)に没した。七八年の生涯は大きく二期にわけて、その後半生が小笠原と親交を結んだ時代ということになる。前後期を二つにわけると、決め手は正保四年(一六四七・四三才)に大阪天満宮の連歌所宗匠に就任し、輝やかしい連歌師としての出発を境としてそれ以後が後半生に入る。本稿の目的は、後半生であるが、本論に入る前に、彼の前半生をも少し語る必要がある。

宗因の生れた慶長一〇年は、一〇七代後陽成天皇。この年の四月一六日には家康のあとを継ぎ秀忠が二代将軍に就任している。その前半生は漂う浮雲の如く、よるべないあわただしい時期であった。それはまず彼が一五才(元和五年)から出仕していた八代城主加藤正方の改易の悲運に遭遇したことであった。二代将軍秀忠薨去の前夜から諸大名の向背についてはかなり神経をとがらせていた幕府であり、三代将軍家光時代になってからは、その弟駿河守忠長に志を

よせていた肥後守加藤忠広、光広父子の所領を没収し、出羽庄内に配流された。正方は忠広の家老で、従兄でもあった関係から京都に隠棲した。宗因も主君正方に従い京・伏見の間に移り住み、いわゆる伏見屋敷詰になった。伏見には加藤家の屋敷があったからである。寛永九年（一六三二）宗因二八才の時であった。加藤家の後には小倉から細川家が移封され小倉には播州明石から小笠原忠真が移封された。これは藩主異動という大きな政治的変改であり、宗因はこうした改易悲運の中に熊本、江戸の間を往復している。この時の経緯については宗因紀行文最初の傑作といわれる「肥後道記」（天理大学に自筆本あり）にくわしい。正方は、忠広父子の申し開きのため江戸に出府。宗因もまた主君正方に伴なわれ江戸に下った。しかし、その効もなく、この年七月二日、熊本、八代はそれぞれ開城となり、ここから宗因の浪人生活が始まる。彼自身の文芸展開の上からは連歌の基礎時代であり、同時に公的には主君正方のために忠誠を尽した多難な時代であった。

少年宗因（通称次郎作。名は豊一。宗因は主として連歌の号。

俳諧では一幽、西翁、梅翁と称す）には夙に文才あり、八才の時郷里釈将寺（天台宗比叡山正覚院の末寺）の豪僧僧都に和歌を学ぶ。

主君正方は連歌に明るく、後年宗因をして天下の俳諧師、連歌師に成長せしめた要因は正方に負う所極めて大なるものがあつた。宗因が里村昌琢（里村南家・昌叱の嫡男・寛永一三年没六二、三才か）の門に入ったのも正方の配慮によるもので、恵まれた環境のもとに

彼みずからも懸命にこの道に精進し、やがて正保四年（一六四七・四三才）、大阪天満宮の連歌所宗匠の榮職に就任したのである。こ

こに彼の輝やかしい連歌師としての出発が始まる。明暦二年（一六五六）九月二〇日五二才の宗因は、天満葺盤屋町に「有芳庵」（後に向榮庵と改名）を新築し、「告天満宮文」を草し、将来への文運隆昌を祈念した。この時、神明の加護を謝して手向けたのが

○神やうけしつるによるべの菊の水

の一句であつた。ここには宗因の新しい決意をこめた息吹がそのまま感じられる。この頃から連歌師宗因の名も漸く天下に広く知られ、全国遊歴の舞台もひろがってゆく。宗因の旅もまたあわたし

かつた。宗因は、昌琢二五回忌「懐旧独吟百韻」の前書きに、「公卿雲客の御座にも召し加えられ、ある時は東の方武蔵国までいぎなはれし折々は、大名高家の御会にも具せられ侍し御慮み、はた筑波の陰よりも深く、和歌の浦の砂よりもしげし」と誌し、昌琢の在りし日を述懐し、波乱多き半生の来し方を偲び、昌琢に感謝の誠を捧げている。ここにはまた昌琢入門の労をとった亡き旧主正方に対する報恩感謝の念も含まれていた筈である。寛永九年熊本と八代が開城となつて以来、世は細川となり、宗因もしばらく熊本にいたが、旧主正方の住む京都に出発したのは翌一〇年九月二十五日で、一〇月一日に入京。正方は亡父菩提のため入道風庵と号していた。宗因は正方の仕官運動にも協力し、正方と共に寛永一七年（一六四〇・三六才）江戸に下つたこともあるが、却つて幕府の忌憚にふれ暮命により広島浅野長晟に預けの身となった。その時正方に贈つた別離の句が

○朝霧に立なをるべき船路かな

の一句であつた。しかし、正方は遂に京師に帰らずこの地で慶安元

年（一六四八）九月客死した。宗因四四才の時で、その一周忌に彼は「追善独吟千句」を手向けた。宗因が連歌宗匠に就任したのは彼の力量が認められ、もとより里村家の推挙によるものではあるが、その機縁が旧主正方により始まったことを思う時、改易以来苦勞を共にした正方に対する宗因の報恩感謝の念は一方ならぬものがあつたに違いない。その前半生から向來庵を結び天下に漸く名を得て天満宮連歌宗匠になるまでの道も決して平坦ではなかつた。

二、豊前小倉小笠原藩と宗因

宗因が天満宮宗匠になったことは、彼の後半生に入る重要な礎石にもつながる。変転極まりない彼の前半生には改易という公的な大きな悲劇があり、その浪人生活における旧主への忠誠と共に連歌師としての将来の身のふり方も考えねばならなかつた。先に引用した「懐旧独吟百韻」の詞にあるごとく彼の前には輝かしい諸国への旅が待っていた。九州小倉藩に下向したのもその旅程の一つであり、小笠原初代藩主忠真公とのめぐり逢いもここにその端緒が開けたのである。忠真が明石一〇万石から豊前小倉城に移封され、將軍家光の命により一五万石に増封されたのは寛永九年（一六三二）で一月一三日小倉へ始めて入部している（忠真三七才）。前述の通り、宗因が加藤家改易の悲運に遭い浪人生活に入ったのはこの年であり時あたかも細川忠利（忠興三男）が小倉から熊本へ移封され、その小倉に入部したのが後年宗因と親交を結ぶに至った忠真であつたこともまことに不思議な星のめぐり逢いといふべきであろう。文武礼法兼備。さらに神仏帰依の信仰深い忠真は、ことに連歌、俳諧、和

晩年における西山宗因の連歌と和歌 — 小笠原藩との關係を中心として —

歌などを修め、小倉藩の文教政策に意を用いた。宗因との親交はこうした文雅風懐の中に静かに芽ばえていったのである。思えば宗因の九州小倉藩下向も決して偶然ではなかつた。彼の九州西下はしばしば行なわれ、豊前國小倉藩關係をあげると次の通りである。

(一) 寛文四年五月（一六六四）（忠真69才・宗因60才）

これは、二代忠雄公一八才元服祝賀のための西下で、小倉城に於て連歌興行。宗因は秋まで数ヶ月滞留した。

(二) 寛文五年二月（一六六五）（忠真70才・宗因61才）

これは、忠真公七〇賀のための西下で、この時小倉城で巻いたのが有名な「小倉千句」（小笠原忠真七〇賀独吟）である。宗因は、三月八日小倉を出発し瀬戸内海を通り、同一六日に帰阪この九日間の海上日記が「西国道日記」である。

(三) 寛文九年四月（一六六五）（忠真23才・宗因65才）

忠真公は寛文七年一〇月一八日、小倉城で没している。このたびの宗因西下は二代忠雄公家督相続の祝賀のため。同時に忠真公三回忌に当たり、小倉広寿山福聚禪寺の墓前で「あととむる道や三年の夏の草」の一句を手向けた。また、「若竹の千代あらたまる園生かな」の相統祝賀の句を忠雄公に捧げた。（この年の西下の旅は長く小倉から博多、太宰府、さらには長崎と続き帰阪は寛文一一年であつた。この間福岡黒田藩の人々とも交流を持ったが、ここでは省略）

(四) 寛文一〇年二月（一六七〇）（忠真24才・宗因66才）宗因は忠真公の逝去と相前後して妻隠宅安貞の死に遭っている。この不幸を始めとして、父次郎左衛門にはすでに五〇才（承応三年）

の時に別れ、ついで孫や女、さらに次男理心を失ったのが六二才(寛文六年)で、家庭的不幸につきつき遭遇した宗因にはすでに早くから出家遁世の志が動いており、この年二月五日広寿山二代法雲禪師の許で薙髮。出家の本懐を遂げた。

○いざ桜われもそなた乃夕嵐

宗因

の一句はこの時の心境である。(この句碑は昭和四四年九月二八日小倉在住鍋山正軒氏(正風末座六世柏麴舎)が七三才の金婚を記念して宗因の遺風をしのび、宗因と因縁浅からぬ小笠原藩主累代の菩提寺広寿山福聚禪寺に建立されたことは、まことに意義深い。碑の裏面には鍋山氏の「思ひ出や花咲くにつけ散るにつけ」の一句が刻みこまれている。ちなみにこの句碑の字は「浜宮千句」(後述)の宗因自筆懷紙からの集字である。

鍋山氏を全年六月四日浜宮にご案内し、同社所蔵の「浜宮千句」の中から字を選び出すのに苦心した思いも懐しい。宗因の出家の句が宗因自身の筆蹟により刻まれたわけである。心ある方は是非広寿山に足を運ばせてこの句碑を見ていただきたいものである。)

(延宝二年正月(一六七四) (忠雄28才・宗因70才)

(内全 六年正月(一六七八) (忠雄32才・宗因74才)

この両度とも豊前築城郡椎田村(現在築上郡椎田町高塚)の彌敷天満宮に奉納した法楽連歌である。(因は、七〇才の宗因が一子宗春(三三才)を伴って小倉に西下し、小笠原一門の人々と共に張行した「賦初何連歌百韻」である。(因は、忠真公の継室永貞院が願主となり、実子忠雄、長高二子の将来の繁栄を祈願

し、宗因に連歌奉納を乞うたもので世にいう「浜宮千句」独吟の大作である。宗因は、小笠原門葉への最後の報恩と思い、老いの情熱を傾けてこの千句を完成し、忠真、永貞院の尊信厚かった浜宮に奉納の任を果たした。以上、宗因と小笠藩との連歌興行についてわかり易く一覽したのであるが、以下その内容について検討してみたい。

三、作品の内容

(1) 二代忠雄公元服の祝宴

寛文四年、二代忠雄公一八才元服の祝賀連歌会を興行された。「小笠原家譜」に「六月上旬、西の御花畠へ御入。宗因御前へ出る。則熟瓜を被下。此瓜につきて一句を御所望ありければ、宗因熟瓜頂載しながら「此瓜のつるは千年の園生かな」と申す。甚だ興に入りとまへり。これによりて御帳子、張羽織を被下」と。宗因は瓜のつるを見て、小笠原門葉の繁栄をそこに見たのである。仲秋名月の夜忠真は、

○すみ渡る千里の外の月影に都の秋をそへてみるかな

の一首を宗因に贈り、宗因はその返しに

○月影のひろき恵みは数ならぬ身にも袖にも余りぬるかな
の一首を詠んでゐる。一五万石の城主と天下の連歌師との暖い心の通い路は身分を越えて静かな風韻の中に育っていった。そのほか重陽の節句には、

○露ふれて今ここに見ん千世の菊 (発句)

○かきほの月の秋深き庭

(公)

十三夜の歌には短冊の歌の贈答がなされる。

○名にめづる詠は同じ月影のまさる今宵は所からかも

(宗因)

○言葉の色そふからに月の名もまさる今宵の詠をぞする

(公)

「御会の野花の題にて」は、

○詠むれば千草の花のさきみだり風の色ある秋の野の原

(公)

○君がめでし千草の花や千世までの言の葉ぞふる色と成らん

(宗因)

の歌を詠み合つて忠雄公元服の歎を尽くしている。宗因初度の小倉藩西下はめでたい忠雄公の元服祝賀に始まる。

(2) 小倉城御賀千句と西国道日記

翌寛文五年、宗因は忠真公七〇賀のために西下。四年の忠雄公の祝賀につづいてこのたびもまた慶事の小倉入りということになる。

この時に巻いたのが有名な「小倉城御賀千句独吟」である。この千句は、現在北九州中央図書館に所蔵されている完本であるが、享保八年(一七二二)の写本で自筆本ではない。すなわち、奥書には「享保八癸卯中春十七日写之卒。初中冬再合」とあり、本文末尾に「一校正卒」と朱書の書き入のある通り、本文中には九ヶ所、全じく朱書で校訂している。そのほか墨書の校異も多く、かなり自筆本を忠実に伝えているとみてよい。但し筆者は不明。横19cm、縦13cm、墨付33丁。表紙は、茶褐色で鳥の子紙を用いている。この千句は、二月一七日から二一日までの五日間で巻いており、「賦物」は「花之春」。巻頭表八句を示すと次の通り。

晩年における西山宗因の連歌と和歌 — 小笠原藩との関係を中心として —

於豊前小倉城御賀千句西山宗因独吟

二月十七日 第一

花之何

年毎の若菜ぞためし千代の春

忠真

子日の松を言の葉の種

宗因

黄鳥の野辺の曙つけ初めて

雪は散つゝ霞立空

打出る水のひまの滝つ波

棹の音する末の川舟

月はまだ竹のしげみにへだゝりて
軒の雫にのこる夕霧

この写本は筆者も見ただのであるが、今村速男氏も指摘している通り(きおんさん三八号)発句の「忠貞」(忠真自身の筆癖)を消し「宗因」と改め、また「忠貞」と書き直している。写本の筆者が藩主に敬意を表して独吟と知りながら迷った上の所為であろう。(これは後述「浜宮千句」が宗因独吟で自筆本にもかかわらず発句は願主(永貞院)にしているのと同じ)小倉千句も独吟である以上、発句も宗因である。年毎の若菜を摘んで千世の春を寿はぐという七〇の賀を祝うのには最もふさわしい祝句である。脇句はこれを受けて子の日の松のめでたさを言葉の種とするという趣向で、若菜と子の日の松と同じ新春の季として発句を映発させている。(二月ではあるが祝意をこめる意味で新春にみたてたのであろう)第三句は、脇句の情景を発展させて鶯の啼く野辺の曙の光景とし、たけ高い。第

四句は、これを受けて雪が散りながら「霞たつ空」を設定させた。第五句は、雪の縁から水を詠み、滝の波がその水の間に白々と流れてゆく早春の情景を点出。第六句は滝の縁から棹の音する川舟を詠み、雑の句となり、第七句には月の定座を詠み秋の季に転じ、第八句は秋の季をうけて「軒の雪に残る夕霧」というように、いかにも宗因らしく初折の表は流暢に展開し、中世の連歌の伝統をよく守りさらに初折の裏「むら雨の過ぎゆくあとはひややかに」と続いてゆく。ここには談林派俳諧の自由奔放さは全く見られず、連歌師本来の宗因の姿にたち帰っているのである。なお「小倉千句」は忠真七〇賀の寿算連歌という祝福の意をこめたためであろう。追加として「玉何」の賦物八句を最後に据えているのが一つの特色である。これを示すと次の通り。

二十一日 追加 玉何
 松と共に齡栄ん家桜
 春めく門の袖のいろく
 国民のゆたかに向ふ年越て
 耕す時をまづいそぐ也
 打解て雪も氷も行く水に
 雨降りはるゝ四方の山々
 出るより光さやけき空の月
 つらなり渡る初雁の声

一鷗
 玄周
 以元
 親之
 重持
 吉備
 重親
 宗因

さて、発句作者に一鷗とあるのは、西一鷗のことで、西家は代々医家。一鷗は加藤家旧臣八代出身。とここでこの一鷗を侍医として

熊本城主加藤忠広は召しかかえている。その間に使者となったのが八代城主加藤正方であった。正方は、前述の通り宗因の主君であったし、忠真はやがて一鷗の名声に接し小倉藩に招携するということになる。ところで、「西氏家系」には「六世玄周後一鷗と云」とあり、これによると脇句の玄周もまた同一人物ということになる。このことについて今村速男氏はくわしく調査され（「ぎおん三八号」）西家は各代一鷗、玄周の名を用い、何代目か、とらえにくいことを述べている。そしてこのたびの発句作者一鷗は時代的にみて七世説をたてられた。同じく西氏の家系に「七世清庵後一鷗と云」をよりどころとしてこの七世一鷗というのである。六代一鷗の没年が万治三年で時代のあわないことを立証しており、卓見である。したがってこの発句、脇句とも同一人物であると解釈してよい。つまり七人で八句を巻いたのであるう。「浜宮千句」にしても先にも述べた通り、宗因独吟千句であり、作者名だけは、発句を願主（永貞院）とし、忠雄公を脇句に、以下長高、惣代としたのも表面だけのことである。一鷗の場合は一人二役にしたものとと思われる。宗因も同座し、わずか八句ではあるが、これを巻いた背後には忠真の賀を寿はぐ小笠原一門の関係者たち、それに宗因も加わり、なごやかな早春祝意のムードを漂わした様子がうかがえる。

さて、「小倉千句」を巻き終えた宗因は、三月八日小倉を出発して帰阪の途につくが、大阪堀江に着いたのが一六日であり、この九日間の瀬戸内海上日記が「西国道日記」である。これは卷子本で、現在小倉の俳人横山白虹氏が所蔵されている。但し、これも伯承という人の写本である。その奥書に、

「此一巻宗因翁正筆にて不図一覽侍るまゝ不取致照写卒。伯承」とあり、年記はない。日記本文の巻末には、

「此日記は舟路のなぐさみに何のたくみもなく島へ泊りしるして御目にかけ奉るばかり也。外に書きもらし広くならぬ様こそ御申したのみ入りし也。西山翁書之」

とあり、ごく控え目に海上の心慰みとして書き綴った意をもらし帰阪の後に藩主忠真公に返送されたものと思われる。文も面白く、和歌三六首、俳諧四句を含むいわば瀬戸内海上歌日記ともいふべき紀行文である。殊に興味深いのは三六首の多数の歌を書きとどめ、俳諧の少ないことである。少年の頃宗因は郷里釈将寺の豪僧僧都に歌を学んだことが、こうした歌日記の形となつたのであろう。宗因の歌を知る上の唯一の資料である。以下内容に入る。八日、出発の冒頭は次の如く始まる。

「豊前の国よりのぼるとて船にのる所に日頃かたらひし人にわかれおしみけるに、

○わかれちほ心づくしの旅ぞとも知らでぞ人にいたくなれ中略

舟の遠ざかるまで互ひにかたちのかくるゝまで見送られかへりみて

○舟路には願ふならひの追風も別れをしばし心して吹け

柳浦大里の沖をすぐる。さきの日大守御船遊びにまいるしに、御茶

屋の桜ことに面白かりける。面影におぼえて、

○わずれめや御船にかけし花の波(大里の沖)

時はやよひの八日、日暮がた赤間関にをしわたる。(注・御茶屋とは藩主など郡をめぐるとの休憩所)

九日、風あしければ、同じ所にありし日もながく、つれづれなれば

晩年における西山宗因の連歌と和歌 一 小笠原藩との關係を中心として

阿弥陀といふ山寺に寿永の帝入水の玉体并平氏の公卿上臈女房の屋
図ありときとて詣でておがむ折しも花のちるをみて、

(1) 世にうみに沈む昔の面影を花に残して明く嵐かな(阿弥陀寺にて)
(以下○印は俳諧)

○やれ嵐南無阿弥陀寺の花盛(同所・俳諧即興)

○花に一句かくこそ下の関手形(同所・諧即興)

(2) ちぎりやく船ちは遠く老が身は残り少なき行末の空(赤間関)

(3) 船のうち浪の枕にきゝわびぬ草の庵の雨にまさりて(同所)

九日は、下関に風侍ちのため上陸。阿弥陀寺(現在の赤間宮)に詣で安徳天皇の入水の昔を偲んでいる。草の庵の雨にまさりて浪の音をわびしく聞き、遠い船路に老いの身を嘆く宗因。阿弥陀寺に耳無し芳一の琵琶の音を悲しく追想したのであろう。俳諧即興には談林口調がうかがえる。下関は旅人の無聊をいやす港であった。

(4) 舟人のはしるしははやともの上方までもとゞけ追風(一〇)

日・はやとも明神にて)

(5) 声々にこれはわが浦田の浦とあらそひいつるあまの釣舟(同日)

・田の浦にて)

(6) ねたうち中略も白川夜舟かな上関から下の関まで(一一日・上関にて)

(7) あはれあはれなれし昔の友舟のおもかげにたつ波の上かな(同)

日・海上にて)

(8) ちのかむろ沖行舟の人はしらずこちはいやいや西風ござれ(同)

日・ちのかむろ)

(9) 世の中をいづくも旅と思ふ身は人の情を故郷にして(同日・同)

所)

(10) 立わかれ思へば人の心ざし嬉しきもさぞうきなこりなれ(同日)

(11) 春草をかまかり山の下蔵おりをゆかんとめよ舟人(一二日・かまかり)

以上の歌をみると種々な内容と表現技法を有している。まず(1)・(2)・(3)・(9)・(10)には連歌の構想と技法とが融合されている。中には(4)・(6)・(8)の如く俳諧的内容をもった歌もある。(5)・(7)などは和歌的情趣と言えよう。とくに(7)の歌の成立の背後には次のような詞書のあることは注意されてよい。「昔、肥後国に有し時、たびたび通ひたりし。はや三十年のあなたになりぬ。その世の人の多くは泉下にかへり、あるは零落していづちともしらず。白頭にしてひとり波上にただよひ、少年の夢遠くおどろく。かなしびにたへずして」と。三十年の昔、渡ったことのあるこの海上を老いに向う宗因は久々船旅を大阪に急いでいる。周防灘をはるかにみて少年の日の友を追懐する宗因。亡き友、行方の知れぬ友の面影を偲んでただ一人老いて海上に漂う船旅の寂寥。それは海上船旅という場所がらの寂寥もさることながら、ただそれだけでなく海上漂泊の姿がそのまま彼の人生であったからだ。

(12) 舟ちゆく遠近人のめにかけていく世へぬらむあら磯の松(一三日・ある島かげにて)

(13) 故郷と思ふかたには行きやらで有し旅寝にかへる夢路よ(同日・いはきにて)

○さそはばや花の都の磯の松(同日・ある島かげに珍かなる松をみて)

(14) 我が身はなにとみはらのさび刀めきゝものとや人のいふらむ(一四日・備後三原にて)

(15) あふと船あぶなげもなくをせやをせ観音力のあらん限りは(同日・阿ふと観音堂にて)

(16) 思ひきやおなじ舟路をゆき帰る老の波までただよはんとは(同日・ともの浦にて)

(17) さらすとも心とまらん明石がた昔の筆のあとぞと思へば(同日・明石の浦にて)

(18) 世々の人しはばざらめや若の下に埋もれぬ名を面影にして(同日・一谷敦盛旧跡)

(19) 柴といふものさびしき夕けむり有とばかりのすまの浦里(同日・須磨の浦にて)

(20) はるばると思ひ入江のなには船あとは霞の八重の潮風(一六日・難波堀江につく)

(21) のどかなる君の千年の長浜にながいくとも思はざりけり(同日)

舟は、安芸(白石) 備前(下津井・大島) 播州(室津・屋島・高砂・明石) 摂津(須磨)と進む。(歌一部省略) ここで注意すべきは、(17)以下の歌で、(17)の詞書には「明石の浦はことにもどころあり。人麿の社もみゆ。入道のむすめ住ませしは、あの見ゆるをかべにやとさながらかの物語みる心地す」とある。柿本神社は明石市丸山にあり、元和四年(一六一八)に現地に移されている。(宗因一才の時)「入道のむすめ住ませしは」とあるのは、いうまでもなく源氏物語の明石入道とその女明石上のことで、源氏が須磨から明

石に移って、はじめてここで知った場所（明石の巻）を回想している。(18)の詞書には「一谷敦盛の旧跡をみる。一生は夢、名は末代よくその渚に身を極められけると涙をさへ手向て通る」とあり、一七才の若さで一谷で戦死した敦盛の最期を悲しく弔った歌である。

(平家物語巻第九・源平盛衰記巻三八・世阿弥作謡曲「敦盛」など参照)(19)の詞書には「須磨の浦は、ことに面白くあはれ深し。光源氏のすみ所、行平の昔も思ひやられていとあはれなり。あまのたま屋、うしろの山かき、柴といふものも塩の煙とりあつめたる所也」とある。この所は、例の光源氏と行平中納言の謫所須磨の浦の淋しさを遠く思い出している宗因である。「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はずこし遠けれど、行平の中納言の「関ふき越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々はげにいう近う聞えて、またなくあはれるなるものは、かかる所の秋なりけり」の名文をふまえたもの。「うしろの山かき、柴といふもの……」以下の文も「須磨」の巻に「おはしますうしろの山に、柴といふ物、ふすぶるなりけり」に依つたもので、同時に、先の引用「敦盛」にも「須磨人にのみ磯馴れ松の立つるや夕煙、柴といふもの、折り敷きて……」(地謡の文)とある。宗因は源氏物語や謡曲に造詣の深い文人でもあった。ついでに謡曲引用の句例を少しあげておこう。

○花むしろ一見せばやと存じ候(各曲ワキの詞)

○ほととぎすいかに鬼神もたしかにきけ(田村)

○やどれとは御身いかなるひと時雨(江口)

○雪の松曾根も久しき名所哉(高砂)

○鳴の足は流れもあえぬ紅葉哉(紅葉狩)

晩年における西山宗因の連歌と和歌——小笠原藩との関係を中心として——

(本題でない例はいくらもあるが、これくらいで止める。寛文から延宝にかけて俳壇は談林全盛時代であった。)

(20)の歌は、海上の旅も平穩に終り難波に帰りついた安堵感と喜びの心情を詠じたもので、「はるばると思ひ入江」、^①「あとは霞の八重の潮風」の表現によくそのことが窺える。この歌の技法は連歌的手法といえよう。「西国道日記」の最後に(21)の歌を以て結んでいるのもこの日記としては全くふさわしい据え方であった。その詞書には「御いづくしみにとどめられたてまつりて、思ひの外長居し、さることかたはしそはかたなく語りいづるうちにも、そなたに向いて心のうちに」とあり、ここには忠真公の温い御心にはだされて思わず小倉に長居したことに對する感謝の至情を吐露し、「のどかなる君の千年の長浜に」という公に對する長寿をことほぐ言葉となったのである。(14)・(15)の歌は連句的発想をもっている。

(3) 浜宮千句

延宝に入りまた宗因は再度西下する。(1)延宝二年正月(七〇才)
(2)全六年正月(七四才)豊前築城郡椎田町の綱敷天満宮に参拜して法衆連歌を奉納した。(紙幅の関係で、このたびは(1)を省略)(2)の奉納主旨については先にのべたのでここではその内容について考えらる。

この千句懷紙は横一九・八cm、縦二二・二cmの黒漆塗りの懷紙箱に収められ、その蓋の表面には銀書で

「謹賦連歌千句奉納 椎田天満大自在天神靈祠所祈 丁亥歳生男
及壬辰歳生男寿算 綿延與浜之砂數無尽福根増長 同詞之林永昌

者 時延宝六年戊午正月吉日 那須氏紹善拜

という千句奉納の縁由を七行（一字空けているのは改行を示す）に分ち、記している。那須氏紹善とあるのは初代藩主忠真公の継室永貞院のことで先夫人円照院（本多美濃守忠政の女）が寛永二〇年卒去の後、忠真公の室となり忠雄、長高の二児を生む。永貞院は那須十兵衛の二女藤と言った。永貞院は忠真公明石に在職の時から仕えた方で忠雄公を生んで以来はことに上下の崇敬を一身に集め、小笠原家隆盛の基礎を固めた令名高き賢夫人であった。才色兼備の濃厚な方で神仏の帰依も深く、蓮の糸で織った仏面曼陀羅は現在も広寿山にその遺物として大切に保存されている寺宝である。忠真と共に、ことのほか浜宮を尊信されていたことは懷紙箱の銀書でも知られる。「丁亥歳生男」とあるのは正保四年（一六四七）誕生の忠雄公。「壬辰生男」とあるのは承応元年（一六五二）誕生の長高のこと。この二人の男子はいずれも小倉城内に於て出生し、生母永貞院は二児の将来繁栄をこの浜宮のまさごの尽きることにないものとして祈願し、みづから願主となり宗因に連歌千句の奉納を依頼したのである。宗因は永貞院の深い祈念に答えて延宝六年正月二日から二五日の五日間に小笠原門葉の發展を祈り、老いの情熱を傾けてこの法楽連歌千句を巻き終えて奉納したのである。宗因はこの千句に自序を書きその心境を語っている。序の全文は次の通り。

「抑豊前国築城郡椎田村浜宮綱敷天神と申奉るは、そのかみ大宰帥にうつさせ給し時、此落に御船つかせ給ひしに旅のおまし所などしつらひまうけ奉るほど、舟の綱の上にしばらくたせ給しを世に綱しきの御影と号し奉る。かかる旧跡なるが故に御社をい

ひあがめて国人歩をはこび、おりおりの御神事をこたる事なし。其しるし新にまします靈社也。爰に此国所をしるよしし給小倉の御城主御母永貞院禪尼公あまねく仏神に帰依し給御心にて、ことさら此御神をたうとみ給ふ事既年久し。よつて法楽の連句千句奉納あるべきよし愚老におほせらる。齡七十有余にして思案不（一枚目の表）堪ながら年比の御心ざしいなびがたくてやうやうにつづりととのへてたてまつる。老のくち葉の色なく侍れども、御信心まことあるにひかれて御納受うたがひ有べからず。御祈念のおもむき小笠原氏長者門葉いよいよたかく盛にして、武運長久國家安全の所ひとへに神慮御照覽にまかせ奉るものならし

西山翁宗因拜書」（一枚目の裏）

齡七四才の老いの思案不堪と言いながらも日頃御恩ある永貞院のために漸くこの千句を奉った宗因であった。「老のくち葉の色なく侍れど、御信心まことあるにひかれて御納受疑ひ有べからず」と誌した心境は、永貞院の当浜宮への信心に心引かれ、かつは多年御恩ある小笠原氏の長門流に対する宗因みずからの謝恩と祈願とを心にこめた老の風懷であったにちがいない。懷紙初折表八句を示すと次の通り。

延宝六年正月廿一日

第一 賦何船連歌

東風吹かば幾千世めでん庭の梅
里なれそむる鶯の声
朝な朝なまがきの山の雪とけて

願主 忠雄
長高

小田すきかへす比は来にけり
引く引くに流れ音そふ春の水

惣代
宗因

さざれ石まの川つらの道

同

行々も涼しき月の出る夜に

同

宿りしばしの雨晴るる空

同

この発句は、延喜元年菅公が大宰権帥に左遷のみぎり二月一日京を発つ時自邸紅梅殿において詠んだ「東風吹かば句ひおこせよ梅の花……」の歌を本歌としたもので、賦物は「東風船」。同じ天満宮の当社には全くふさわしい発句である。脇はこれを受けて「鶯の声」を配し、第三句は、「まがきの山の雪」のとけそめた早春の景を点出。春の句を五句続かせ、第六句目は「水」の縁から「川つらの道」の雑句となり、第七句に定座の「月」の句を詠み秋の季に移る。第八句は雑句として明るい雨上りの空を詠みこみ、以下初折裏の句「広き野に松ひとむらのかげ深み」に続き展開する。先述の通り、表面上、発句の作者を永貞院、脇の付句忠雄、三句目長高、四句目を惣代としているが、独吟千句の性格としてすべて宗因の代作とみてよい。

次に、今ひとつ「浜宮千句」の最尾第十卷初折の表八句をみると左の通り。

延宝六年正月廿五日

第十 賦山何連歌

まもれ猶つき弓うたう家の風
さかへひさしき霜の真禰

晩年における西山宗因の連歌と和歌 — 小笠原藩との関係を中心として —

ゆふかくる松は木だかき陰そひて
いさごふみゆく道はずしも
浦つたひみるみる汐の遠ひかた
秋の千鳥の立居なく声
初雁もわたらむ空の月ふけて
田面かつがつをけるしら露

この発句の賦物は「山風」となる。表八句には小笠原藩と浜宮とを結びつけた宗因の風懐がよく詠みつながれている。由来小笠原家は弓馬、礼法の三法を以てその家伝とし、忠真が信州より播州に移封した際にもまずこの三法講習の場を設置してこれを奨励したといわれ、特に故実にも熟達していた小笠原以鉄斎を旧封信州より招致して顧問とし、毎年正月には必ずこの演技の式を挙げ、永く小笠原家の家風として伝えられてきたものである。忠真自身もまた劍槍の術に心を用い、明石在城当時からすでに劍客宮本武蔵を招きその子伊織また重く用いられ、劍法の教習に従わせた。槍術、馬術の妙技を極めた高田宗伯にも縁を厚く遇しているなど小倉藩に於ける文武礼法は忠真の治世方策であった。この発句は以上のことからも小笠原家の三法伝流を詠みこんだ句としてまことにふさわしい。脇句の「さかへひさしき霜の真禰」には小笠原藩と浜宮とのゆかりを象徴させ三句以下は浜宮の景勝を展開させつつ句境は進む。そして名残八句は次のように完結する。

なれなれしふりがみのかたらひに
すゑたのもしきえにしこそあれ

ただならぬ夢のあふせを待たて
うやまふころ神ぞしるらん
八重雲をはらふ御稜の河原風
みなもととをき水のゆく方
もろ人の花もてあそぶさかづきに
松と梅との十がえりの春

この名残八句は、すでに亡き忠真のあと、小笠原門葉の繁栄を見守ろうとする永貞院の心を体し、春秋に富む三二才の若い忠雄公に輝かしい将来を囑望する老いの宗因との浅からざる縁を見る思いがする。挙句「松と海との十がへりの春」は、寛文九年宗因が忠雄公家督相続の祝儀に西下してより十年に当たることをふまえており、「浜宮千句」がこの挙句を以て終結した意味は極めて深く、白砂青松の地に天神の梅を配し春を寿ぐ祝意とその表現技法も至妙といふべきである。寛文から延宝にかけて貞門・談林の間には激しい論争がおこり、「波・団」(延宝二年・去法師著)「中庸姿」(延宝七年・菅野谷高政著)「破邪顕正」(延宝七年・中島隨流著)などの諸書が刊行された。談林俳諧の新風はやがて宗因の志とは別な放縦乱脈に走る向きも生じ、延宝九年正月一〇日には「俳諧且は不仕候。当風あわぬ事、無用に存じ候」と藤波修理宛に書状を送っている。保守、革新は文学に於ては常に対立する運命をもつものである。しかし彼は負けてはいなかった。「宗因五百句」(延宝四年)「宗因七百韻」(同五年)など秀れた俳諧撰集を刊行しているのである。一方この間にも彼は浜宮奉納「百韻連歌」(延宝二年)を小

笠原関係の人たちとも巻いているし、「浜宮千句」もまた然り。「連歌面白く成申候。俳は当風成まじく覚え候」ともいっている。結局宗因のゆきついた果ては連歌の世界であった。宗因が忠真公の知遇を得て永貞院、忠雄公にも御恩を被り、事あるごとに小倉に西下していることを思えば、文教政策に力を入れた忠真公を一つの柱として小笠原藩の文化圏は宗因を中心として形成されていった。このたびは同じ浜宮に奉納された「百韻連歌」や、宗因の九州関係の発句「三籟集」についてもふれ得なかった。他日を期したい。明暦二年九月、大阪天満宮に向榮庵を結び、「告天満宮文」を草して神に文運の隆昌を祈った五二才の宗因の文学的出発は、この「浜宮千句」を奉納し終えた彼にはまさしくみずからの文運の結実を同じ天満宮の浜宮において見たのではなかったか。長い間恩顧を被った小笠原藩に対する最後の報恩が豊前国浜宮において千句を完成したことは彼みずからも忘れ得ない感激にひたつたにちがいない。「浜宮千句」の一字一句に注がれる老いの情熱は激しくはないが、閑かにその流麗な自筆の中に香り高い風韻を伝えている。以上、このたびは晩年における宗因の連歌と数少ない和歌について小笠原藩を中心にしほって述べてきた。なおもっとと広く宗因と九州との関係については今後の調査を期したい。